

絲綢之路

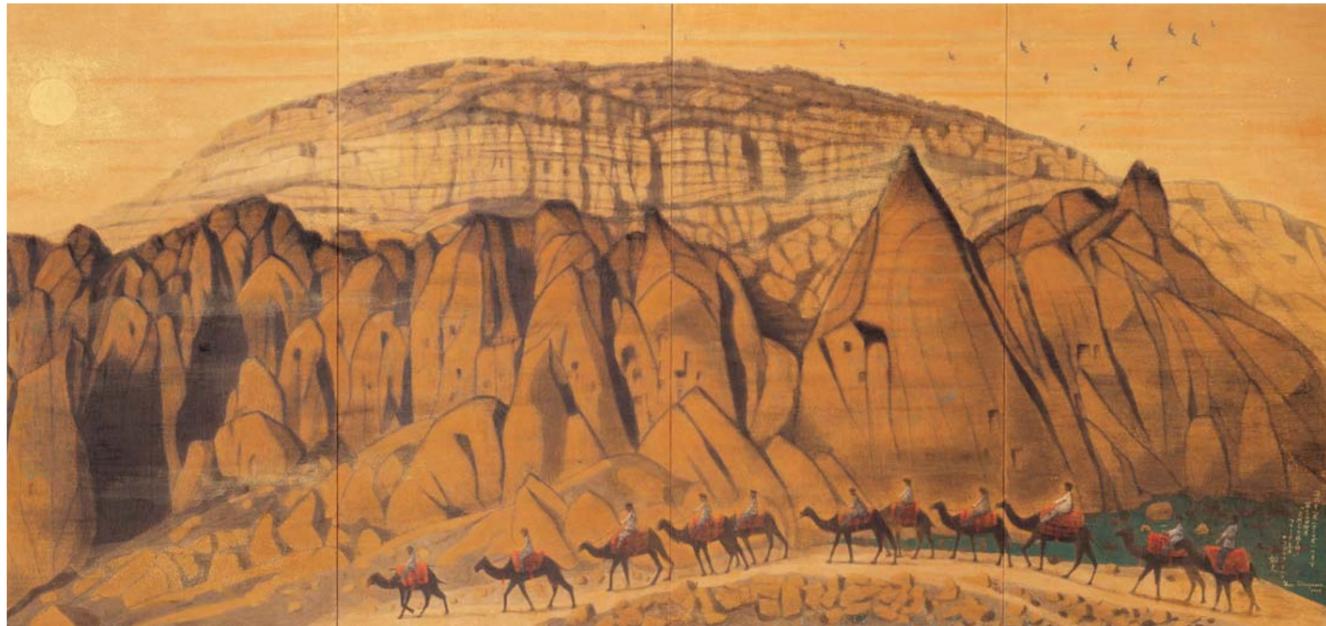
シルクロード

S I L K R O A D

2010-秋

No.64

●表紙の画および題字は、
平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいたものです。



文明の十字路を往く～アナトリア高原カッパドキア・トルコ 2009年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればとこの葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：
東京芸術大学 吉田左源二名誉教授

チュニス旧市街 (チュニジア共和国)



ユネスコ世界遺産(文化遺産)シリーズ

©UNESCO

アラブ・イスラーム都市としてのチュニスは七世紀に始まります。九世紀にはザイトゥーナ・モスク(大モスク)を中心として城壁と堀に囲まれた町として知られ、商業・文化都市としても栄えました。十四世紀にはメデイナ(旧市街)と南北の両バート(城外地区)がほぼ現状となり、東方貿易の拠点として活況を呈しました。

(一九七九年に文化遺産として登録)
社団法人ユネスコ協会連盟

理事長就任の御挨拶



宮田亮平

この度、第四代理事長に就任いたしました宮田亮平です。当財団は日本の文化を守り、世界の貴重な文化遺産の保護に貢献する公益財団法人として、この春あらたに出發いたしました。その舵取りを任せられましたことは光栄であるとともに、大変、身の引き締まる思いです。私は、学生時代を含め、永年、東京藝術大学にお世話になっており、現在は学長として、いわば恩返し立場で大学の発展に尽力しております。芸術大学は、単に芸術作品を創造するための存在ではなく、一国の伝統文化を受け継ぎそれを後世に引き継ぐという重要な役割を担っております。当財団は、そのような役割を側面から支援するきわめて有意義な活動を行っており、それを支えているのは、個人および法人の賛助会員の皆様方です。衷心より感謝を申し上げます。

ところで、故平山郁夫理事長は、瀬戸内海の生口島の御出身ですが、私も新潟県の佐渡島の生まれです。ここに芸術に生きる者として共に島育ちという奇遇を感じます。佐渡島と申しますと、皆様、頭に浮かべるのはまず金山でしょう。しかし、ここは流刑の島でも

ありました。承久の乱に敗れた順徳上皇はじめ、自身の信念を貫いた日蓮上人、能の大成者である世阿弥など、様々な人々が様々な理由で島に流されてきました。しかし、これらの人々は単に流されてきただけでなく、華やかな都の文化・芸術と当時の最先端の知識と思想をもたらしたのです。そして、島に根づいた文化は独特の発展を遂げました。文化・芸術は人類が生み、育んだ知的生産物です。これは人類にのみ許された特権で、私たちの住む地球上には多くの異なる文化・芸術が存在します。それはまた、その数だけ異なる民族が存在することを意味します。

それぞれの民族が先祖から受け継いだ文化・芸術は、それぞれの誇りでもあります。そうした文化・芸術の交流は世界平和にとって大いに意義があります。また、これを次の世代に伝えることは、今を生きる私たちの義務です。そうした活動を支援することは大いなる喜びです。当財団は微力ではありますが、創設以来この支援事業を続けてまいりました。その組織の長として任務を遂行することは、私自身大変名誉なことと思っております。

私の生家は、伝統工芸の制作を生業としており、日本文化や伝統美というものに幼い頃から接して育ちました。また、佐渡島は、沖に対馬海流が流れ、暖流と寒流が合流する海域に位置しているため、植生がきわめて豊富であり、島内で北海道と沖縄の両地方特有の植物が同居する、非常に珍しい地域でもあります。振り返ってみれば、私の感性は、そのような、海洋国である日本の縮図のような地で、日本古来の伝統美に加え、様々な花々や草木にあふれた独特な環境の中で育まれてきたものと言えるかもしれません。

現在、私が金工作家として力を注いで制作しているのは、イルカをモチーフにした「シユプリンゲン」(飛躍)というシリーズです。受験のため、佐渡から東京へ向かう船中で偶然出会ったイルカの遊泳する様は、強く、永く私の意識の中に留まっています。当財団も「シユプリンゲン」ができるよう全力を尽くしたいと思っておりますので、今後とも皆様様のより一層のご指導・ご鞭撻、さらにはご支援を何卒よろしくお願ひ申し上げます。

グローバル化の下での文化財がもつ意義

文化庁長官就任にあたって



文化庁長官 近藤誠一

「ああ、ついに夢が叶った」と私は心からの満足を感じました。外務省の広報文化交流部長であった二〇〇四年の秋、シルクロードの都市サマルカンドを訪れたときのことです。レギスタ広場やビビ・ハヌム・モスクの美しいブルーは今でも目に焼きついていす。子供の頃からどこか郷愁に似た思いを抱いていたこの街は、その期待に十分応えてくれました。タシケントや天山山脈を望むカザフスタンのアスタナなどのバザールは、交易の中心であった往時のにぎわいを感じさせてくれました。

それから六年後のこの夏、文化庁長官を拝命したとき、真っ先に頭に浮かんだ情景のひとつがこのシルクロードの街でした。ユネスコ日本政府代表部大使として世界遺産の保全にかかわったこともあり、文化財がもつ意味についてぼんやりと考えてきましたが、改めてその重要性を感じています。

古い時代から語り伝えられ、歴史の試練を受けて受け継がれてきた貴重な文化財を見ることには、二つの重要な意味があると思います。第一は、それ

により人生における文化・芸術の意味を正しく理解し、人間の人間たる所以を考えることにつながることで。今日の世界は、テロや地域紛争、経済危機などのニュースに追われ、軍事力や経済力にひとびとの関心が向けられがちです。安全で豊かであることは重要ですが、それはあくまで人間が人間らしい、豊かな心をもって生き甲斐のある生活を送るための条件に過ぎません。

私はかつて南仏のラスコー洞窟の躍動的な動物壁画を見たときの衝撃を忘れることができません。寒さに震え、餓えに苦しみ、野獣の声におびえていたクロマニヨン人たちが、一体何故このような素晴らしい壁画を残したのか？ それは人間にはどんなに苦しくとも、何か訴えたいものがある。それは自然の恵みへの感謝の念や慈しみの心かも知れない。否、逆に自然の脅威に対する恐れと畏敬の念かも知れない。まだ見ぬ神なものへの憧れと祈りかも知れない。それを表現し、他人と共有し、共鳴し合うことを願う気持ちがあるに違いない。それこそが人間が人間であることの証である。クロマ

ニヨン人よりもはるかに物質的に恵まれた生活をしている現代の人間が、目の権力闘争と物質的欲望ゆえに、この人間の根源的な心を見失っているとしたら、極めて恥ずかしいことではないか。

文化財のもつ第二の意義は、祖先が残してくれた偉大な文化財を通して、歴史に思いをめぐらせ、現在の世界を考え、そして人類の将来のあるべき姿を考えることができることです。それは世界遺産に登録された文化遺産だけではありません。それぞれの地に残る文化財は、その地域で、それぞれの時代に生きてきた祖先たちの努力と汗の結晶であり、それを受け継いできた人々の誇りの象徴でもあります。今そこに生きる人々が、そのような素晴らしい文化財を受け継いできたことに誇りと、それを後世に伝えていく責任を感じることで、グローバル化の下で失われつつあるアイデンティティの再確認を行うことができるのです。

これらの文化財の多くが、自然災害や経済発展のために危機に瀕していることは、ユネスコの世界遺産条約成立

カマン・カレホユック考古学博物館開館

カマン・カレホユック遺跡発掘調査

中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所は、一九八六年以来トルコ共和国のほぼ中央部に位置するカマン・カレホユック遺跡で考古学の発掘調査を行っています。発掘と同時に土器、獣骨、人骨、鉄製品、青銅製品、金製品、鉛製品、石製品、ガラス製品、種子、コイン、粘土板等沢山の遺物が次々と出土しています。展示に叶う出土遺物は、これまで遺跡から東五十キロにあるクルシエヒル考古学博物館に納めてきました。

日本のODAによる博物館建設

クルシエヒル考古学博物館にはしっかりとした設備がないため、出土遺物の殆どが収蔵庫内に眠ったままになっていました。折角掘り出したものが誰の目にも触れず二十年以上も眠っている



カマン・カレホユック考古学博物館

と言うのはちょっと考えられません。考古学の研究には、遺跡があり、その側に出土遺物等を研究する場所、そして出土した遺物を展示する博物館が整っていることが理想です。それを一口で言うのは容易ですが、なかなか現実的には難しいものです。今回の博物館完成で多くの方々の支援もあり、なんとか理想に近づいたのではないかと思います。建物自体は日本のODAの予算で建設されましたが、展示ケース、そして実際の展示等に関してはトルコ側はカマン・カレホユック遺跡と同様の丘状をしており、地中に展示室が配置されていると言う極めて特異な形をしています。

作業員への授業

発掘調査では、毎週金曜日に一時間作業を手伝ってくれている作業員へ『考古学の授業』を行なっています。何故発掘を行うのか、出土した遺物を記録しないまま取り上げた時の問題点等を説明し、少しでも考古学に興味を持って貰うことを目的としています。保存修復の専門家、文献学の専門家が話すこともあります。作業員の多くは発掘、土器洗い、遺物の分類を手伝ってくれていますが、中学生から高校生

が中心です。彼らに質問を投げかけながら授業を進めています。博物館建設構想も彼らと会話を交わしているうちに徐々に組み立てられたと言っても過言ではありません。

カマン・カレホユック考古学博物館

開館した博物館は二〇〇八年四月に着工、二〇〇九年三月末に完成、同年四月にトルコの文化・観光省へ手渡されました。そして、今年の七月十日に寛仁親王殿下、彬子女王殿下のご臨席を賜りカマン・カレホユック考古学博物館オープニング式典が行なわれました。式典には三千人を超す多くの人々が参加。大賑わいでした。式典後、博物館は一般公開されましたが、地元の人々にとっては、待ちに待った博物館だったのでしょうか、熱心に展示ケースを覗き込んでいるのが印象的でした。開館後の博物館は、連日沢山の来館者で賑わっています。

博物館の案内

この博物館で、私は毎週日曜日の午後案内を行なっています。発掘を手伝ってくれている作業員、特に中学生の少年が家族を連れてやってくることもあります。彼らが母親に、一生懸命展示ケースの中の遺物を説明しているのは微笑ましい光景です。誇らしげに母



中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所 所長 大村幸弘



カマン・カレホユック考古学博物館展示会

も、粗末にするとは到底考えられませんが、文化財を法律で守るのも一つの手段かとは思いますが、それ以上に、博物館を通して文化財の持つ意味などを丁寧に地元の人々に伝えることも大切なことではないかと考えています。少年たちが発掘したものが展示され、それらを彼らが楽しそうに家族、仲間、仲間と話を話す。これだけでもカマン・カレホユック考古学博物館を建設した意味があつたのではないかと思います。

の経緯からも明らかです。われわれが今後、人類にとって貴重な文化遺産を正しく保全し、前記の目的を果たしていくためには、政治の強い意志と、それを支える専門家の方々の知識と技術、そして国際協力が不可欠です。そうした関係者をつなぐネットワークとして、この「絲綢之路」は極めて重要な役割を担っています。長官就任のこの機会に、皆様のご健闘を心よりお祈り致します。

筆者略歴

- 生年月日：昭和21年（1946年）3月24日
- 職歴：昭和50年 外務省入省
- 48年～50年 英国オックスフォード大学 留学
- 63年 国際報道課長
- 平成8年 外務省経済局総務参事官
- 15年 外務省文化交流部長
- 18年 ユネスコ日本政府代表部特命全権大使
- 20年 ユネスコ世界遺産委員会日本代表（オブザーバー）駐デンマーク特命全権大使
- 22年 7月 文化庁長官

筆者略歴

- 一九八二年 財団法人中近東文化センター研究員
- 一九八四年 財団法人中近東文化センター主任研究員
- 一九九八年 財団法人中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所所長 現在に至る

日本とアジアの懸け橋をめざして

サムスン・シルクロード文化財保護フェローシップ・プログラム修了に向けて



中国現地学生交流会で平山画伯が学生に講演

ら自国文化の誇りをも継承していく、という人材重視の考え方に強く共鳴いたしました。

サムスンは、「人材と技術を通して、人類社会の発展に貢献する」ことを企業理念としています。理念の冒頭に「人材」を掲げるのは、当社が人材を最も重視していることの表れであり、これまで人材育成にはグループをあげて取り組んでまいりました。また、グローバルにビジネスを展開する企業の責任として、世界各地の現地法人や事務所が主体となり、様々な社会貢献活動を行っています。

その中で重視しているのが、グループ全体で共有している社会貢献の哲学です。お腹をすかせた方に魚を差し出すより、釣りの方法を伝授する。飢えた人に魚をあげても、食べてしまえばまたいずれ同じ飢えがおそってきます。それよりも、釣具の作り方や釣りの方法を教えて差し上げることができれば、その後の自立につながるお手伝いができるのではないのでしょうか。

社会貢献活動「サムスン・シルクロード文化財保護フェローシップ」の誕生

サムスンの日本人である日本サムスンも、グループの哲学を等しく受け継いでいます。当社は一九五三年、サムスン初の海外拠点として、日本での事業を開始しました。以来六十年近くにはわたり、半導体や電子部品等の輸出入を通じて、日本と韓国、アジアを産業面でむすぶ懸け橋の一翼を担ってまいり



人材育成プログラムの一環として、中国陝西省韓城市梁帯村にある東周早期の墓での青銅製品取り上げ作業のようす(写真提供:中国文化遗产研究院)

日本サムスン株式会社 企画担当 部長

難波 健一

文化財赤十字構想との出会い 人材育成への取り組み

人類共通の遺産であるシルクロードの文化財を、国や地域の枠を超えて保護し、次世代に継承する

故・平山郁夫画伯が提唱された文化財赤十字構想に当社が出会ったのは、二〇〇三年のことでした。中でも、文化財そのものの保護はもちろんのこと、それら文化財を有する現地の人々にこそ遺跡の修復や保存に携わってもらい、人々の生活を支援しながら

財保護フェローシップ」です。

同フェローシップは、シルクロードの文化財保護を担う専門家の育成を目的としています。日本サムスンと中国サムスンが協力し、文化財保護・芸術研究助成財団にプログラムの推進パートナーとなっていたいただきました。アジアの未来に向けて専門人材を育成するという同フェローシップの試みは、まさに日本とアジアをビジネスでつなぐ当社の使命であると感じ、二〇〇六年から五年間にわたり一〇〇名以上の専門家を育成してまいりました。また、活動の原資は、日本では一般の方々から寄付を募ることといたしました。平山郁夫画伯の作品を通して、シルクロードの東端・奈良から六年間かけて西端のローマまでを旅するというシリーズ性、希少性の高いカレンダーを毎年制作いたしました。そして、寄付をいただいた方には、お礼としてこのシルクロード



中国北京でのフェローシップ基本調印式。左から 平山画伯、中国サムスン 朴根熙 社長、中国国家文物局 張柏 副局長(当時)

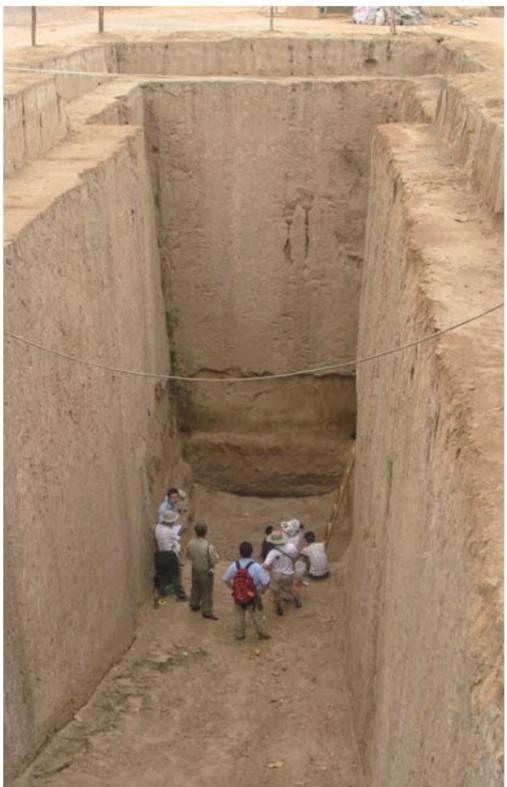
カレンダーをお贈りし、集まった募金は全額、専門家の育成の費用として寄付させていただきます。広く日本社会の皆さまと、アジアの文化財を人類共通の遺産として保護していくことの意義を共有させていただくことができましたのではないかと思います。

思えば、同フェローシップが契機となり、平山郁夫画伯のお考えに直接触れる機会を得ることもできました。二〇〇五年九月、中国北京で行われた

フェローシップの基本調印式には平山郁夫画伯も同席され、関連して当社が企画した日中の学生交流会の席上で、一時間以上にはわたって講演をしてくださいました。日本ならではの世界貢献として、これまで恩恵を受けてきたアジアの国々に文化支援を通じて恩返しをしたい、という熱い思い、文化交流こそが世界平和につながるという信念は、画業を通じてつねに平和を訴えてきた平山郁夫画伯にしか語れないものであると強く印象に残っております。また、同フェローシップの理念は先生御自身のお考えとまさに一致するとの心強いお言葉をいただきました。

フェローシッププログラムの修了

平山郁夫画伯が心から愛し、大切にされたシルクロードという文化の道。日本と韓国、中国をむすぶその道がなければ、サムスンの現在もないという感謝の気持ちとともに、二〇一〇年、平山郁夫画伯の作品と共に巡るカレンダーの旅も、無事、終着点ローマに到着する運びとなりました。十二月には、中国にてプログラムの修了式を開催します。また、平山郁夫画伯の文化財赤十字構想への



中国陝西省韓城市梁帯村にある東周早期の墓発掘現場での実習風景(写真提供:中国文化遗产研究院)

想いとこれまでの活動を綴るとともに、このたびのフェローシップで得られた成果、さらには現場で尽力いただいた諸先生のお考え、受講生の声などを取った記録の書籍を、文化財保護・芸術研究助成財団より出版していただくことになりました。日韓中の絆を後世に繋ぎ、かつその意義を広く伝えることができましたらと願っております。そして日本サムスンは、今後も、日本とアジアをむすぶ懸け橋の役割を、微力ながら務めてまいりたいと存じます。

末筆にはなりますが、文化財保護・芸術研究助成財団、東京文化財研究所、中国国家文物局ほか関係するすべての方々、趣旨に賛同し寄付して下さった日本の多くの方々からお礼を申し上げます。

プレゼント

先着五十名様にサムスン・シルクロード文化財保護フェローシップ事業の記念本をプレゼントいたします。ご希望の方は、官製はがきにて「郵便番号、住所、氏名、電話番号」を明記の上、事務局「〒一〇一〇〇七 東京都台東区上野公園十二丁目一五〇 サムスン記念本プレゼント係 村木宛」までお送り下さい。締切りは「二〇一〇年十二月三十一日(金)消印有効」とさせていただきます。

「永遠の美」の象徴

バイヨン寺院の保存活動



千葉麻由子

ちは まゆこ

早稲田大学大学院
創造理工学研究科建築学専攻

アンコール・トムの地を 見出した伝説の王「癩王」

「めくるめく青空よ。孔雀椰子よ。美しい翼の鳥たちよ。これらに守られたバイヨンよ。俺はふたたびこの国を領く。青春こそ不滅、肉体こそ不死なのだ。……俺は勝った。なぜなら俺こそがバイヨンだからだ」

*

バイヨン寺院の北側に広がる王宮の東面に南北五〇〇mにわたって築かれてい



バイヨン寺院内回廊東面に見られる癩王伝説の一場面

を得て三島由紀夫の戯曲『癩王のテラス』が創作されている。戯曲『癩王のテラス』は、栄華を放った若き王ジャヤヴァルマン七世が業病に冒され、肉体が腐り果て病み衰えていきながらも、「永遠であるもの」としてのバイヨン寺院の建立に執念を燃やす悲劇である。諸行無常の世において、不朽であるものとは何であるのか。王がまさに息絶えよ

光り輝くバイヨン寺院の 恒久保存に向けて

三島の滅びの美学を、刹那の煌めきを、青春という限られた美しい時代を、現実

うとする時、肉体と精神の対話が繰り返される。肉体の勝利で結着し、冒頭に挙げた台詞が叫ばれる。いつの世も色あせない美しさを持っているのは、ありもしない「永遠」に執着した精神ではなく、今この現在を生き生きと感じられる肉体なのである。「永遠の美」はないからこそ、私たちは生あるこの瞬間にみる「美」に心を震わせ、それが素晴らしいのだと謳う。失われることが既に予見されているからこそ、今この瞬間の美ほど価値のあるものはないのだと。

肉体が精神に説く、「なぜあとに残す？なぜ形見にする？バイヨンは現在だ。いつも光かがやく現在だ」

「永遠の美」の象徴であるバイヨンも滅びゆくものとして例外ではなかった。



バイヨン寺院は都城アンコール・トムの中心に存在する

とあるが、その通りで、バイヨン寺院も生きていくのだ。

文化遺産という言葉が使われるようになって、それは有形遺産と無形遺産に分類されるようになった。最近では Living Heritage — 生きていく遺産 — が注目され、現在も続く生活の文脈の中にある遺産として捉えようとする動きが高まっている。これは「遺産の保全」側からの動きでもあり、これまでの有形遺産の保存活動が地域社会と切り離して行われてきた反省として、遺産の持つ価値を総合的に護るために、地域住民の信仰や伝統、生活を護りながら遺産を活かそうという考えが重視されたのである。バイヨンは変わらず生きていく、地域社会に活かされるながら。過去の人たちが単に残した形見なのではなく、現在に生きる人々、未来に生きる人々にとって、バイヨンはそ

の時々々の輝きをもって存在するものなのだと思ふ。

そのような意味で、保存作業とは、「現在」において、「過去」を理解し、「未来」を鑑みて行うものだ。時間を超えて、保存対象そのもの、それにまつわるものを共有することなのだ。失われてしまうからこそその一時の価値よりも、かけがえない一時を遺産を通じて繋いでいくことの価値を強調したい。この意識の連鎖を大切に、遺産と関わっていききたいと思ふ。

未来へ繋ぐ 「浮き彫り保存プロジェクト」

私自身も、このバイヨン寺院に魅せられた一人で、石造建造物の保存という課題をもつて、東南アジアの積石建築の調査研究、保存修復活動を行っている早稲田大学・中川武研究室の博士課程に進学した。バイヨン寺院内回廊浅浮き彫りの保存チームに参加させて頂き、保存科学、岩石学、生物学、情報処理学、さらに修復施工技術の専門の先生方との連携の中で研究を行っている。

一つの大きな課題として「浮き彫りの記録」がある。記録とは、保存された状態にある情報という意味を持つ。バイヨン寺院の内外二重の回廊に施されている浮き彫りは、言わば当時のクメール王朝の姿を綴った「記録」でもある。人の想いが託された遺物は「記録装置」としての役割を持ち、過去から現在、現在から未来へと、情報を継いでいく役目を担っている。創建から八世紀余りが経った



保存材料の耐候試験を行っている曝露台



JSAオフィスでの石材保存ワークショップの様子

において耐候試験を行っている。試供体作成は実験室での作業なので、修復現場で働くカンボジア人スタッフにとっては、何の目的で曝露台が設置されているのかが不明で、「これは何だ？」と質問されることが多かった。そこで昨年夏にJSAのカンボジア人エキスパートを対象に、浮き彫り保存チームの活動に関するワークショップを行った。ワークショップでは、保存材料の開発や砂岩の種類、石材の劣化診断方法など、石材保存に関わる全体を伝えた。これを契機に、試供体の正体のみならず私自身の正体も伝わった気がする。

石の上にも三年とは言いが、私が浮き彫り保存プロジェクトに初めて参画させて頂いたのが二〇〇七年十二月のことなので、今年の十二月で三年を迎えようとしている。バイヨンの上に何年になるかはわからないが、浮き彫りに彩られた過去を現在、未来へと繋いでいくための一助を担えたらと思ふ。

筆者略歴

- 一九八一年 東京都生まれ
- 二〇〇五年三月 東海大学文学部歴史学科考古学専攻卒業
- 二〇〇七年三月 筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修士課程修了
- 二〇〇八年四月 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻(中川武研究室)博士後期課程に在籍中
- 二〇一〇年四月 日本学術振興会 特別研究員

JSA:日本国政府アンコール遺跡救済チーム

勝福寺荒茂毘沙門堂の

「木造金剛力士像吽形の保存修理」 事業について

中世文化財が守られてきた
自然豊かな町「あさぎり町」

熊本県球磨郡あさぎり町は、九州南部の内陸部、山々で囲まれた盆地の中央部に位置しています。町の中央部には日本三大急流の球磨川が東西に貫流し、自然豊かな田舎の風景を残しています。

球磨郡と人吉市を含めた地域を球磨地方と呼称しますが、この地方は、鎌倉時代に入国した東国御家人の相良氏が戦国大名となり江戸時代まで支配した地域で、盆地のためか敵の侵入を阻み、また、国難に対してもうまく対応し滅亡や国替に至るようなこともなかったため、中世の建造物や彫刻等の中世文化財が豊富に残る特色ある地域です。

あさぎり町でも、平安時代中期以降の仏像が残されていて、平成十六年度から仏像修理事業に取り組んでいます。その中でも平成二十一年度を実施した勝福寺荒茂毘沙門堂の「木造金剛力士像吽形の保存修理」事業について述べたいと思います。

熊本県最古の 木造金剛力士像を後世へ

勝福寺荒茂毘沙門堂には県指定重要文化財に指定されている八軀の仏像が残されています。

熊本県球磨郡あさぎり町教育委員会 主幹

北川賢次郎

す。平成二十一年度に修理を実施したのは「木造金剛力士像吽形」で、八軀のうち六軀目の修理となりました。この像は像高一八八センチで、鎌倉時代中期頃に製作されたものと推定され、木造の金剛力士像としては熊本県で最古といわれています。修理前の状況は、木材強度の低下、赤彩の剥離、手首先や腕等の欠失、接合部の緩み、後世修理時の鉄釘の錆による木材劣化、ほこりによる汚れがあり、非常に傷んでいました。

修理経費については、所有者の立場からいえば、これまで五軀の仏像を修理しているだけに経費負担も多く財源的に厳しいものがありました。所有者の負担軽減のため、熊本県教育庁文化課に相談し、担当者の勧めもあって「公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団」の助成事業を申請することになりました。財団の助成金は、平成二十年度事業については採択を受けていて、二カ年続けての申請でした。幸運にも平成二十一年度も助成金申請は採択され、このことは、所有者、県や町財政の厳しい中、本当にありがたいという気持ちでした。

修理仕様については、基本的に前年度修理の「阿形像」と同様とし、解体を実施して、木部の樹脂補強、指先・足先などの欠失部で復元可能な場所については復元を行いました。



木造金剛力士像吽形

文化遺産を後世に遺したいという所有者の方々と関係者各位の意欲や理解があつて今回の「木造金剛力士像吽形」修理事業を実施することができました。修理前の状態と比較して、見た目の古さは遺したままですが、木部は樹脂強化され、所々の欠損部は補修され、矧ぎ目の緩みもなくなり本当に立派になりました。すばらしい文化財を次の世代に遺す機会に恵まれたことを感謝いたします。

した。腕の欠失部や表面の赤彩については、像容が不明な亡失部は敢えて作らないことにし、赤彩も自然退化にまかせて剥落止め処理をするにとどめました。修理の全般的な指導については、熊本県立美術館の有木芳隆氏にご協力をいただきました。修理工期は平成二十一年八月に仏師の工房へ搬送し、それから翌年三月までの期間でした。修理完了には、仏師による修理報告書が提出されて「木造金剛力士像吽形の修理事業」は完了しました。

計報

◆永年に亘り当財団の事業委員として格別のご支援、ご協力を賜つてまいりました、中野政樹様(東京藝術大学名誉教授、日本工芸史)が六月四日、鷲塚泰光様(前奈良国立博物館館長・日本彫刻史)が九月十六日に、ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

文化財赤十字カレンダー募金 のお知らせ



二〇一一年版カレンダーは、徳川美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」を東京藝術大学日本画研究室が現状模写した作品を題材にしました。源氏物語の有美の世界と、模写技術の

素晴らしさを鑑賞してください。

一口二千五百円以上のご寄附を頂いた方にこのカレンダーを贈呈いたします。お申し込みは左記までお問い合わせください。

【お問い合わせ】

財団カレンダー係

TEL(〇三)五六八五―二三二一

受付期間 二〇一〇年十一月一日(金)

受付時間 二〇一〇年十一月十四日(金)

受付時間 十時三十分～十七時
(土日、祝日、年末年始はお休みです)

今月の表紙

二〇〇九年秋、再興第九十四回院展に出品した巨匠最後の大作である。カッパドキアは、一九六六年に東京藝術大学の中世オリエント遺跡学術調査団の一員として訪れた平山画伯にとって思い出の地でもある。それはまた、シルクロードの旅の序章でもあった。この作品は今夏、イスタンブールで開かれた個展に出すことを予定していたため、落款部分にはローマ字でも署名している。体調不良を訴えるなか、大作を完成させた画伯の画家としての執念が観るものにせまってくる。



Pick up 事業

真言宗青蓮寺(神奈川県鎌倉市)所蔵の木造愛染明王坐像が東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室の飯内佐斗司教授らによって修復されました。鎌倉時代造立とみられ、大正十二年(一九二二)の激震で被災し、ほとんど解体状態にありましたが、同時代の作とされる五島美術館所蔵の愛染明王坐像と比較することにより基準となる構造や形状を解明することができました。



修復前



修復後

お願い

○賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い
当財団の活動趣旨にご賛同いただき、ご支援いただける賛助会員の法人、個人の方々を募集しています。

法人正会員 年額(1口) 50万円
個人正会員 年額(1口) 1万円
維持会員 年額(1口) 10万円
案内および賛助会員入会申込書のご請求、その他お問い合わせは事務局にご連絡下さい。

○アフガニスタン文化財復興支援募金と流出文化財(文化財難民一時保護)
当財団は、アフガニスタンの文化財復興を支援するために募金を行っております。募金は郵便振替(00160-5-12319(公財)文化財保護・芸術研究助成財団)並びに財団宛の現金書留で受け付けております。郵便振替と現金書留には「アフガン募金」と記載してください。お問い合わせは、事務局まで。なお、当財団は特定公益増進法人の認定を受けており、五千円以上のご寄付並びに賛助会費は税法上の優遇措置の対象となります。皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

編集後記

今年は、春先が寒く、初夏と思いきや猛暑の日が続き、身体にはきつい年ですが、明るい話題は、平城遷都一三〇〇年でにぎわう奈良。訪問客は平年の二倍に達するほどのようです。財団後援の「日中韓文化交流フォーラム」も当地で十一月に開催されます。これを機に、古代における日本と中国そして韓国との文化の絆と交流の歴史にいつぞう関心が深まればと思います。一句「細の道、奈良に平和の梵鐘響き」。今秋、菊の香に満ちた奈良へはいかがですか？

広報誌「絲綢之路」(シルクロード)

二〇一〇年 秋号 通巻第六十四号

★平成二十二年十月十五日発行
★編集発行/公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団 事務局◎
〒110-0007 東京都台東区上野公園十二―五十五
電話 〇三五六八五―一三二一
FAX 〇三五六八五―一五二二
URL: http://www.bunkazai.or.jp/
E-mail: jinukoku@bunkazai.or.jp
★印刷 株式会社 東都工芸印刷